
ツールの手記

さらさら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツールの手記

【Nコード】

N4114Y

【作者名】

ちぢぢぢ

【あらすじ】

ここはどこ？ 私は誰？ …… そんな状態で目が覚めた主人公は、全く真っ白な記憶の中、魔法学校二年五組、三班の男女七名と出会い、邂逅し、成長していく物語。

クラフトテープは切りにくい。

黒い影が一つ、頭の上を走ったので、やっと僕は目を覚ます事ができた。

全く、どうなっているんだ。辺りは前後も上下も左右も、六面が全て真っ白な壁が敷かれている。継ぎ目も、多分本来はあるべきの扉も、どこにもない。ただ、だだっ広い空間に、白と、そして僕だけが有る。

……黒い影。僕を触らずに揺り起こしたそれは、どこへ行ったのか。それを探してまた見回したけれど、影の正体どころか、照明すらない。一体、どうして、この壁は白く居られるのだろう。光無くして、白いのは何故なのだろう。

何秒か、何分か、何時間か。あるいは何日か、ずっとそんな事を考え続けた。そしてある時、突如として、時間切れを感じた。意識は、急速に、遠ざかって行った。

今度は明晰な目覚めだった。誰かが僕を直接的に揺さぶり、僕は能動的に目蓋を開いた。

「ん……む」

覗き込んでくる顔の向こうで、けたたましい程のランプが、こちらを照らしつけている。反射に従って、僕はまた目蓋を閉じかけ、こちらを見ている真上の顔が、言葉に表しにくく愛らしいのに気付いて、手を伸ばした。

「ふ、ふにゃ……っ！」

突然僕に髪を撫でられた彼女は、僕の期待を大きく上回るほど可愛く鳴いて、僕の手を払いのけた。長い茶髪が揺れ、とても良い香りが出た。

「………………。おはようございます」

さっきの仕草と鳴き声については忘れていらしく、やけに単調に挨拶の声を掛けてきた。僕も、すぐに返そうと思ったのだが、ふと、どうも彼女が誰だか分からないようだと思付いた。いや、そもそも、僕が寝ているこのベッドにも、とんと見覚えがない。

「あの、お名前、教えてくださいませんか？」

僕に挨拶をする気がないと見た彼女は、少し声に弾みをつけつつそう言った。

「……………」

ふつむ。僕がどうしてここに居るのかも分からないが、ここに来る前に何をしていたのかも、全く思い出せない。

「……………君は？」

答える代わりに、逆に訊ねてみた。

「上原香澄です。…………ツールの方ですか？」

かすみ、香澄…………何やら、可愛らしい名前だ。本能からか、また手を伸ばしかけたが、軽く睨まれたので途中で断念する。

「ツール？」

再び、代わりに訊ねる。

「ですす！ ……げふん。皆を呼んで来ますね」

元気に返事しすぎて、小さく照れる。うわ、無茶苦茶可愛い。あざといほどに可愛い。可愛い分、何の説明にもなっていないと言っか、訳が分からないままだ。

仕方ない。こういう時は、与えられた情報を正確に精密に分析する事で、現状を理解するべきだ。

まず、今僕が寝ているのは、そこそこに丈のあるベッドの上だ。周りを見渡せば、明らかにテントのようである。ベッドも、よく足下を見れば、簡易用と言った風だから、多分どこかのキャンプに居るのだろう。何度見ても、辺りに散在する懐中電灯やメモ帳に関する記憶はなかった。

さっきまで見ていた夢については、ちらほらながら覚えがある。だが、夢を見るまで……つまりは、最後に眠った時以前の事は、やはり全く思い出せない。かなり不思議だが、実際そうなのだから仕方なかった。

それから、さっきの女の子。香澄ちゃんだったか。あれは可愛い。いわゆる意思疎通の取れる癒し系というジャンルなのだろうが、その頂点に居ると言っても過言ではないだろう。仲良くなっておいて間違いのない相手だ。

ツール、と彼女は僕を指して言った。ツールとは、道具という意味の英単語である。道具……道具の方ですか、という質問には、一体どんな意味があるのだろうか。……そう言えば、自転車競技の事を、ツールと呼ぶ事があったっけ。そう思い付いて自分の服を見直したが、残念ながら至って普通の服と普通のズボンで、スポーツマンに

は到底見えない。

……。何も、分からない。そうこうしている内に、さつき人を呼ぶと言つて出て行った足音が、いくつか増えて帰ってくる音が聞こえてきた。もうこの際、香澄ちゃんに全部訊ねれば良い。多分、疑問の半分ぐらいは解決してくれるだろう。

「お待たせしました。……皆、どう？ ツールだよな？」

香澄ちゃんと、あと……女の子が二人、男が二人、女が一人だ。個人的に、女の子と女は分けるべきだと思っている。片や天使、片や悪魔なのだ。いや、どうでも良い事だが。

「どやるなあ。パツと見、魔物とかには見えへんけど」

男の一人が、遠慮もせずじろりと僕を見て、腕を組んだ。

「あら、そうですかしら？ 耳にタグも付いているようですし、明らかにツールだと思いますわよ？」

「ホンマかいな……おお、ホンマや、こら本物やな。ワシら殊勲やでえー！」

女の子の一人……仮にお嬢様系と名付けよう、お嬢様系が高飛車に言つと、やで男は仰々しく驚いて見せた。驚いて耳に手をやると、何かピアスのような物が付いているようだった。ピアスは嫌いなんだけどなあ。

「ツールなら、本隊に連絡した方が良いんじゃないか？」

女が言う。一応、普通女と名付けておく。

「よっしゃ。健、連絡しといてや」

「なんで僕が……」

明らかに気の弱そうなもう一人の男……たけし、健と言うらしい彼は、ぶつぶつと文句を言いながら、そのままテントを出て行った。

「……「ジャー」」

そんな彼を、後ろからぱつっん黒髪の典型少女が背伸びしつつ応援して見送った。うん、こっちも捨て難い。僕は、ツンデレみたいな面倒なタイプよりは、和むとか癒されるとかが好きなのだ。……。とりあえず、僕だけが取り残されているようなので、いいかげん質問を始める事にした。

「皆さんは、何をして……。君達は、何をしてる人？」

危ない、ちょっと敬語になりかけた。ここで変に敬語を使うと、その後の人間関係にまで悪影響を与えかねない。小さい事だが、そんな僅かな心がけこそ重要なのだ。

「戦争や」

出来れば香澄ちゃん辺りに答えて欲しかったのだが、返答してきたのはやで男だった。

「戦争……戦争？」

「そうや。まあ、学校内のクラス対抗の、やけどな？ 題するとしたら……そやなあ、魔法学校二年クラス対抗魔法戦争って所やるか」

そのままやんけ。……おっと危ない、流されてしまった。

そのままではないか。……いや、もつと重要な事がある。今、やで男は、魔法と言ったのか。

「そして、お前がツールという訳だ」

普通女は、珍しくもないポニーテールの髪を見せつけるように大きく弾みながら、僕を指差した。ううん、話が全く分からない。とりあえず、ファンタジックな事になっているのだけは、理解した。

「うん、とつてもよく分かりません」

今の敬語は、使つても大丈夫な敬語である。

「……良いですこと？ まず、あなたはツールという、汎用人型兵器で、私達の先生に作られた存在ですわ」

「ふむ、ふむ」

お嬢様系が、理解の遅い小学生を教える中学生のように、腰に手をあてがって説明を始めた。ああ、分かりやすい。僕は、汎用の人型をした兵器『ツール』で、彼女達の先生に作られたのだ。うむ。

「そして私達は、魔法使いになる為に魔法学校に通う生徒、という事になりますわね」

「ほう、ほう」

彼女達は、魔法学校へ通う生徒達である。さっきの先生と言うのは、多分その魔法学校の先生の事だろう。うむ。

「今は、クラス同士で陣地を奪い合う、陣地合戦の真っ最中ですの。ツールは、ちょっとしたアイテムとして、先生が用意したのだと思

いますわ」
「なる、ほど」

……。言っている事は分かるのだが、あまりに奇想天外と言うか、安物のアニメに出て来そうな設定だなあ、と思わされる。僕が人間でないというのは、普通最後に明かされるべきである。

「……ちゃんとお聞きですこと？」

「もち、ろん」

「不良品ですわね、このツール」

「あいしんくそー」

「壊れてるんでしょうか」

女の子三人に罵倒された。ちょっと嬉しい。……いやいや、かなり嬉しい。

「まあ、そんな訳だ。それでお前……いや、名前を決めておいた方が良いな」

「……「ゴーゴー」」

「よし、じゃあお前の名前は、ゴーだ」

「やだ」

黒髪ぱつぱつ少女は、どうしてか分からないとでも言いたげに眉をひそめ、小首を傾げた。擬音で表すなら、多分「ほにゅう」という感じだ。可愛い。

「どうして嫌がるんだ？ 強そうで、良いと思うぞ」

「強そうな名前よりは、普通のが良いです」

「そうなのか。男は、強い名前が好きなのかと置いていたんだが…

……」

「あほやなあ、こいつが男かどうか、まだ分からんやろ？ 男つ気のある女つちゆう線も、まだ残つとるんや」

はい、間違いなく男です。……おおつといけない、つい敬語が口を突いてしまう。凄い威圧感というか、僕だけ取り残され感である。

「男だよ、多分」

「ほしたら自分、名前何がええ？」

「ええと……じゃあ、誠で」

『誠』という名前は、二股とかし易くなるモテモテ・ネームで、可愛い女の子が三人も居るこの現場に置いては、多分最強と見て間違いない。ただし、外野からもバッシングを受ける危険性もあるが、誠死ね、とか。

「……私は、智香と申しますわ。名字は蓮実ですの」

「うーうー」

「こっちは、戸野愛子ですわ」

お嬢様系が智香、黒髪ぱつん少女が愛子。丁寧にインプットした。彼女らとは、今後仲良くしていきたいと思う。上手くいけば結婚まで。子供は四人ぐらいかな。無論、全員女の子の子供だと良い。三人は『お父さんと結婚したい』タイプで、一人は『お父さんなんか大嫌い』タイプなのが望ましいだろう。

「最後に私が、この班のリーダーの塚田楓だ」

知らない内に最後になっていた。まあ、男二人は別に良いか。興味もないし。

「うん、よろしく」

「誠くんは、どれくらい戦力なんですか？」

くん付けに敬語とは、香澄ちゃんは萌えの何たるかを分かっていると見える。

「さあ……？　そもそも、まだあんまり事情把握してないかも」

「やはりガタが来ているようですね」

「あいしんくそー」

「元々壊れていたんでしょうか？」

また女の子三人に罵られた。ここは桃源郷なのだろうか。

……真面目に戻ろう。香澄ちゃんの質問は、きつとツールとしての能力を訊いている物だ。僕はさつきツールについて初めて知ったような有様なので、そんな事は分かりっこない。以上だ。よし、言葉に出そう。

「さあ……？」

あれ、さつきと同じじゃないか。

「しゃーないツールやなあ。ええわ、この指輪付けてみいな」

「え……やだ」

どうして名前も知らないやで男に、婚約指輪など渡されねばならないのか。

「達樹。ツールは、アクセサリを嫌がるんですのよ？」

「そつやったなあ……。しゃあない。守が帰ってくるまで待つか」

どうも僕は、その理由はともあれ、ツールとしての性質を持つてはいるようだ。魔法、ツール、それから指輪に陣地取りゲーム。可愛い女の子に囲まれている理由。目の前にあるのに、分からない事しかない。

「……………」

これがゲームだとすれば、恋愛ゲームではなく、多分RPGゲームだろう。僕はそう思いながら、耳のピアスを外そうと、一人奮闘を始めた。

ゴミ箱に捨てること。

よし、分かった。ピアスは外れない。どうやってやったのかは分からないが、耳たぶに完全に同化してしまっているようだ。

とりあえず、僕は陣取り合戦のアイテムとして、彼女らに拾われたようだ。彼女らの話によれば、僕は人間ではないらしい。まあ確かに、僕には人間だと証明できる何かがある訳でもないし、むしろ耳のタグなど、ツールらしい所の方が多いから、多分アイテムなんだろう。……と納得してしまう辺りが、いかにも単純で人間でなさげだ。

「ツールは、言語能力や思考能力を有し、魔法も扱い得る人型アイテムですわ。耐久力も人間とほぼ同じで、違うのは服従性とコントローラの有無ですわね」

「コントローラ？」

「そうですね。例えるなら電灯のオンオフのように、起動と静止を制御する操作盤があるんですの」

意外にも、智香ちゃんが一番親切に、僕の疑問に答えてくれた。

「そもそも、魔法って何さ」

「魔法は、魔法ですわ。ツールでも、魔法についての知識はありますか？」

「僕の中だと、空想ジャンルに入ってるなあ」

「不良品ですね。空想でなくて、現実にあると思えばよろしいですわ」

あと、丁寧に罵ってくれるのも智香ちゃんの良い所だ。

しばらくすると、さっき出て行った気弱そうな男……健守（恐る

しい事に、これでフルネームで、たけしまもと云うらしい）が帰ってきて、やっと話が再開した。

「健、このツールの能力を見てくれ」

「ん……了解」

ピアスをぐい、と引つ張られる。と同時に耳の付け根に強い痛みを覚えて、僕は呻き声を上げた。

「……癒し、だつてさ」

そう言つて、彼はピアスを投げ付けるように離れた。……何だ、こいつ。威勢はないのに、妙にやる事が乱暴だ。これだから男は嫌いで、女の子が好きなのだ。

「癒しやて？ なんや、外れちゃうんか、それ」

「外れではないでしょうけど、バランスは悪いですね……」

「ごーごー」

また、僕の分からない所で話が進んでいる。愛子ちゃんの「ごーごー」だけは、可愛い事がとてもよく分かるのだが。

「タグには情報が載っているんですけども、誠さんは治療魔法系でしたの。でも、この班には、既に三名も治療魔法系が居て、余り気味なんですよ」

「ふむふむ。……治療魔法系って？」

「治療と武器と純魔法で、魔法三系と呼ばれていますわ」

何と分かりやすい。……いや、説明の内容どうこうよりも、とりあえず僕に向き合つて会話してくれるだけで、涙が出るほどに嬉し

い。他の方々は、僕を全く気にしないで勝手に話をしているだけで、全く僕に説明してやるうと言う気概がないのだ。

「武器魔法系は、三対三で試合をする時には、前線向きですわね。純魔法系は、後衛になりますわ」

それにしても、どうも、悪質なRPGの設定を聞いている様にか思えない。

いくら僕をそっちのけで話した後、彼女達は僕にナイフを手渡した。

「敵が来たら、それ持って最前線で戦ってな」

「ちょ、ちよっと、達樹？ 彼は、治療魔法系ですよ？」

「……僕も、それは無理があると思うなあ」

……。いや、このナイフかなり殺傷能力なさそうなんですけど。

「ほなら、誰が前線出んねんな」

「それはそうだけど、でも、誠くんにやらせるのはおかしいよ」

何か、もめているらしい。何でも良いが、取り残すのだけはやめて欲しいと思う。

「……いや、そうだな。ツールは、そんな風に使うべきじゃない。

やはり、私達は後ろへ回ろう」

「うーうー」

「……やっぱそうやわなあ」

今度はナイフを取り上げられた。忙しい連中だ。

「誠くん、もう歩けますか？」

「え、あ、うん。多分」

「では、早速移動しましょう」

そう言いつつ、香澄ちゃんが指を鳴らすと、周りを囲んでいたテントが大きな風を受けるかのようににはためいた後、一気に空へと舞い上がり外の景色を露出させ、最後には香澄ちゃんの手へと小さな球にまとまった。僕は、啞然とした。疑わしかった魔法という言葉が、急に現実を以って証明されてしまった。

「ベッド、降りて貰えますか？」

「う、うん」

僕がベッドから下りて地に足を着けると同時に、さっきの小さな球がベッドをも吸い込み、一つの緑色の物体になった。

辺りを見回す。その風景は、まさに荒野と呼ぶにふさわしい、殺伐とした物だった。殆ど草も生えていないせいで、剥き出しになっている土の地面は、ひどく隆起を繰り返して乾燥し、ついでに色も白んで栄養状態も悪そうだ。生き物の気配がない。

「おうおう、やっと出てきたなア！ 待ちくたびれたぜエ！」

否、訂正する。向こうの方に野生チツクなむつきむきの男が立っているが、多分あれは生き物だ。何せ、見るからに生き生きしている。

「待ち伏せとは、卑怯な男だ」

「俺様は、わざわざお前達が出てくるのを、待っててやったんだぜ

エ！」

「……あほやなあ、自分」

何かよく分からないが、とりあえず目の前に居るのは敵らしい。そう理解して改めてむっきむきの男を見直してみると、耳にピアスのような物が大きく風に揺れた。やだなあ。ピアスするような奴は、男でも女でも大嫌いだ。

「ピアスをしていますから、恐らくツールですよ。お気を付け下さいまし」

「見てくれからして、まず武器魔法系やるなあ……。こら、苦戦必至やで」

何でやねん。……もとい、どうしてそうなるのか。こちらは七人、多分何の役にも立たない僕を除いても六人で、向こうは一人だ。明らかに有利ではないか。

「……武器魔法系、楓ちゃんしか居ないんです。守くんと愛子ちゃんが純魔法系で、あとは全員治療魔法系で……」

香澄ちゃんが、すかさず解説を入れてくれる。なるほど、それはかなりまずい。さっきのテント魔法以外見た事はないが、ファンタジーRPGから類推するに、多分遠距離からの魔法には詠唱時間とか、タイムラグとかがあるのだろう。あと、治療系はか弱いに違いない。

「……………」
「……何だ、誠。女性を注視するのは失礼だぞ」

唯一の頼りらしい楓ちゃん……否、風格からして楓リーダーは、これもよくゲームに出て来そうな、冷静で頼りになる女剣士キャラっぽい。こういうキャラは得てして筋肉キャラには弱い。基本的

なパワーが足りないからだ。

「楓ちゃん…さんは、強いのか？」

「いや、残念だが激ヨワだ。時間稼ぎ要員だからな」

何と言う。いやでも、後衛の魔法使いが強ければ、RPGにおいては問題ない。

「うーん、僕の純魔法って、人に勝った事ないんだよね……。愛子ちゃんはご覧の通り」

「うーうー」

「しか、言わないし」

……衛生班だったようだ。なるほど、ここに現れたツールの僕が、治療系だなんて絶望的すぎる。HPを回復したいのに、MP回復アイテムばかり拾うようなものだ。しかし、こんな班が前線に居るのは、何かの陽動なのだろうか。あるいは、単に捨て駒？

「話は終わったかい！ こちとら待ちくたびれてるんだぜイ！」

律儀だなあ。

「よし。作戦はこうだ。まず、私が突撃する」

「まあ、他に手はないさかいな」

「愛子は、この辺り一帯に水を撒く。……やってくれるな？」

「いえすまいるーどー」

「守は、水を沸騰させて、水蒸気にする。あとは、湯気に隠れて退散だ。名づけて、蒸気幕作戦っ」

仕方ない事とは言え、逃げるのは決定事項らしい。それにしても、

こつ、煙幕を張るような魔法とか使えない物なのだろうか。

「丸聞こえだぜエ！　だがまあ、聞かなかつた事にしてやるウ！」

良い奴だ。ピアスしていても、良い奴って居るんだなあ。ちょっと感動した。

「……と見せかけて、ただひたすらに突撃するだけの作戦に変更する。名づけて、ひたすら作戦」

「ブーブー」

楓リーダーが、愛子ちゃんの後押しに伝えて、筋肉の良い奴に突進を始めた。と同時に、守と愛子ちゃんが目を閉じて、初めて魔法使いつぱい、くねくねとした動きをする。

「ま、ワシらは待機組っちゅー奴やな」

「それで良いの？」

「ワシら、戦闘技能はないさかいの。しゃーない、しゃーない」

全滅フラグを感じた。前線では、楓リーダーが、筋肉の良い奴と今にもすれ違おうとしていた。

それちょっと高くない？

それは、恐らく壮絶な戦いだった。

筋肉男が拳に火を纏わせて殴りかかってくるのを、リーダーが水のような液体で出来た剣で弾き、その隙に愛子ちゃんが筋肉男の上から大量の雨を降らせた。その後再びリーダーが水の剣で斬りかかると、知らない内に凍っていた雨の水たまりに足を取られて、筋肉男が前のめりに倒れ込んだのだ。

……いや、やっぱりしょぼい戦いだった。

「よし、逃げるぞ！」

楓リーダーの号令に、僕達は全速力で走りながら従った。筋肉男は僕に聞こえるほどの大声で呻いていたが、追っては来なかった。やはり、良い奴だった。お前の事は忘れない。

二百メートルほど駆けつけた後、僕達は岩場に腰を下ろした。

「……向こうのツールも、外れっばいね」

「私たちと互角のツールなんて、初めて見ましたよね！……あ、いえ、初めて見ました」

相も変わらず香澄ちゃんはとても可愛い。こうして勢い余って声を張ってしまい、その後目を伏せながら言い直す姿などは、格別と言っている。

「香澄ちゃんは可愛いなあ。……さっきの筋肉ツール、弱かったの？」

「ああ。拳に炎を乗せていたから、武器魔法系には違いないんだろ
うが、多分底辺だな。あと、私の方が可愛い」

あんなに強そうな体付きだったのに、底辺なのか。と言うか、楓リーダーもよく分からない所で張り合ってくるなあ。確実に香澄ちゃんのほうが可愛いのに。

「……誠さんはまず、『向こうのツールも』の『も』を気にするべきですよ」

「そやなあ。いや、何ちゅうか、純粹な感じでええとは思っけどな。最初の一言が余計やわなあ」

「よく分かんないし、役立たずだと思うよ。それに、香澄ちゃんの方が可愛いし」

最後の方は出来るだけ強調して言った。ちゃんと照れて、頼にほのなか朱を差す香澄ちゃんに、追い討ちの一撃を加えたつもりだ。

……に、しても。さっきの弱小ツール筋肉タイプは、何故一人で僕達を襲ってきたのだろう。底辺なツールである彼一人で攻撃したところで、勝算はない筈である。つまり、勝つ以外の目的で出てきた可能性が高い。とすれば、その目的は……。

「……この辺の地図って、ある？」

「私の方が可愛いと言うのに……。うん？ この辺の地図？」
「うん。貸して欲しい」

頭が、急速に回転するのを感じた。受け取った地図を広げて、現在地と味方陣地を示して貰う。さっきの荒野の二方向には丘があり、逃げるなら味方陣地方向か、その逆しかない。そして、味方陣地方向には狭い一本道しかなく、開けた土地となると、この大小の岩が転がる岩場があるのみだ。

「……何や、どうしたんや？」

「逃げた方が良いと思う」

「ええ？ どうして、でしょうか？」

香澄ちゃんは、また良い香りを振り撒きながら首を傾げた。ああ、愛らしいけど、今はそんな事を考えている暇はない。

「奇襲が来るから！」

「……訳が分かりませんが、真に迫る物がありますわね」

「そうかなあ。妄言としか思えないけど……」

「そやけど、さっきのツールが追ってくるかどうかどうせ面倒やし、離れ
といた方がええんちゃう？」

「うーうー」

時間は殆ど残されていない、と思う。向こうからすれば、こちらが休息を終えて動き出すまでに、攻撃すべきなのだから。僕は、楓リーダーを見つめて、決断を迫った。

「いや、だから、私の方が可愛い」

とぼけた顔で楓リーダーが言うのと同時に、かなり近い所から爆発音が響いた。

「これはマジもんやで！」

「よし。作戦は、味方陣地へ各々撤退する、だ。名づけて、一目散作戦っ」

更に、左右の丘から手榴弾のような物が投げ込まれてくる中、僕達は一斉に全方向に散じた。しかし、当然の事ながら、味方方向への道は一つの細い物しかなく、道の入り口で僕達はまた結集してしまった。更に、道の向こうから、こちらへと走ってくる足音が聞こ

えてくる。

「……困まりました……よね」

「妄言じゃなかったかあ」

「ど、どう致しますの？」

僕はさっきより、頭を早く回転させた。前は、狭い道に敵が居る。左右は、丘になっていてその上から爆弾を投げ込んできている。後ろは、弱小ツール筋肉タイプだが、多分それだけではないだろう。そのどれもに十分割り振れるほど敵に戦力がない、と仮定しなければ、もはや袋の鼠だ。

一番最初、僕達をここへ逃がす為にけしかけてきたのが弱小筋肉だったと言う事は、恐らくこちらの戦闘能力が低いのを敵は理解している。弱い僕達に対して、一方向にだけ不十分な戦力を置くとすれば、それはどちらだろうか。

「……前に、突撃するのが良い」

「前は敵だらけやっちゅーねん！」

「数は多くないと思う」

「迷っている暇はない。可愛いのは私……もとい、前方に突撃だ！
名づけてがむしゃら作戦っ」

「ぐーぐー」

楓リーダーは、さっきの氷剣を持ちつつ、先陣を切って駆け出した。ありがたい。前後窮まった時には、勢いよく突き出すしかないのだ。

「目の前に敵が居る！ 愛子、足下に水を！」

「いえすまいろーどー」

恐らく、あえて戦力の穴を空けるなら、前方だろうと思った。丘はどうせ越えるまでに倒され切ってしまうだろうし、となれば、敵が考える次の僕達の行動は、後退だと考えたからだ。それに、前方に味方陣地がある僕達は、どちらにせよ前進せざるを得ないのだ。た。

どうやら予想は的中し、前方の敵は数も少なく、狭い道で僕達と同じ様に難渋している様だった。しかし、実際の戦闘は、楓リーダー達に委ねるしかない。そして多分、そこに勝算は薄い。

「守！ 蒸気幕作戦だっ」

「ああ、そんなのあつたっけ。了解」

上手い。敵の足下の水を熱し、湯気で薄っすらと靄が掛かった。

向こうは思わぬこちらの突撃と視界の不良に、少なからず動揺しているに違いない。後は、楓リーダーらの戦い振り次第だった。

その時、一瞬、靄んだ前方に、強い光が走った。思わず、駆けていた足を止めて、じっと目を凝らして見るが、下からずっと上がり続けている湯気に阻害されて、全く何も見えない。

「ど、どうなつとるんや？ 楓！」

「楓さん……楓さん！」

僕の後ろから、達樹と香澄ちゃんが楓リーダーを呼ぶが、どうも返答がない。さっきの地図からすると、抜けるにはまだ早いし、何より前に居た筈の敵はどうなったのか。

「……………」

恐る恐る、僕達は二歩、三歩と前へ歩んだ。前でも、愛子ちゃんに守、智香ちゃんが立ち尽くして、前の様子を窺っていた。彼女ら

も吸収して、六人で歩を進めていく。ありがたい事に、後ろからの追手はまだ来ていないようだった。

そうして、十歩ほど進んだ頃、水に浸かりながら気絶した楓リーダーが足下に倒れているのが見つかった。智香ちゃんは、急いで駆け寄って手をそこそこポリウムのある胸にかざしながら、いくらかホツとした表情で、

「……痺れていますわね。恐らく、どなたかが電気魔法を使ったのですわ。この辺りは、塩を含んだ土が多いようですし……」

と言った。

「うちゅー事は、何や？ 敵はんもやられとるうちゅー事かいな」

「そうなりますわね。……今がチャンスですよ」

「よっしや、逃げんで！」

達樹は、楓リーダーを後ろに負うと、またその狭い道を駆け出した。僕たちも、意識のない敵に申し訳なく思いつつ、彼らを踏みつけ踏みつけ走りながら、道が開けるのを待った。いや、しかし、香澄ちゃんや智香ちゃん、愛子ちゃんに踏まれる事の出来た敵には、正直羨ましい気持ち隠しきれない。

「よっしや、外やでえ！」

胸の分重そうな楓リーダーを背負いながら、それでも一番前を走り続けていた達樹が、息一つ乱さずにそう叫んだ。凄いバイタリテイだ。大きい方が好みなのだろうか。

達樹の言う通り、景色は、それから間もなくして大きく開けた。左右、前方、後方以外の全ての角度に、景色が開けている。

「……もうちょっと、逃げた方がいいんじゃない？」

「そうだね。まだ、追い掛けてくるかも知れないし……誠くんはどう思う？」

「香澄ちゃんの方が可愛いかな」

何だか、さっきまで熱く込み上げてきていた物が、急速に引いていくのを感じた。香澄ちゃんの照れた顔が、再び見たくなくなった。

「誠さんは、変なツールですね」

あと、罵られたくもなかった。

それちょっと高くない？（後書き）

テスト明けー、幸せー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4114y/>

ツールの手記

2011年11月27日23時56分発行